

冬の幻

飯島耕一

冬の幻

飯島耕一

著者略歴

昭和五年、岡山市生れ。東京大学文学部仏文科卒。主な著作に、『詩集』『他人の空』『わが母音』『私有制に関するエスキス』『ウイリアム・ブレイクを憶い出す詩』『ゴヤのファーストネームは』（高見順賞）『バルセロナ』『宮古』『夜を夢想する小太陽の独言』、小説集『空想と探索』『海への時間』『別れた友』『三つの物語』、評論・エッセイ集に『日本のシュルレアリスム』『田園に異神あり』『島の幻をめぐって』『港町』『女と男のいる映画』等がある。

冬の幻

昭和五十七年十二月二十五日 第一刷

定価千九百円

著者

飯島耕一
いじま こういち

発行者

西永達夫

発行所

株式会社

文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三二二三
電話 (〇三) 二六五一一二二一

印刷所

理想社印刷所

付物印刷

凸版印刷

製本所

矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

目次

熱狂

5

四本足の鶏の話

27

梅雨の入り

45

遠い傷痕

81

主のない家

113

冬の幻

161

あとがき

205

装画——サム・フランシス
装丁——菊地信義

冬の 幻

熱 狂

十一年前のある夏の日に、確かにこの足で闘牛場に行つて本物の闘牛を目撃したのだが、それが午後もかなりおそくのバルセロナの闘牛場だったというだけで、正確には何時何分から開始されたということも、闘牛が何時間続けられたかということも、藤堂宗宏はついこの間まで忘れたまままでいたのだった。多くのことを忘れてしまっていた。

そういう一切は忘れていても、闘牛場の雰囲気や、いくつかの情景は、それこそ一つの幻と化しながらも、藤堂宗宏の心の内部にしっかりと生き続けていた。生き続けていただけではなく、それはときにうづくようにうごめいて、藤堂を苦しめた。あそこには熱狂があったという幻と記憶が、来る日も来る日も同じような街の景色や、あいも変らぬ生活への対立物となつて、藤堂の頭の中に苛立たしげな白日夢として揺曳した。その白日夢をかつちりとした、強烈なかたちとして思い描こうとして、彼はそれがこの遠い島国のしめつた空気の中では不可能なのを思い、ますます氣力の失われるのを覚えた。熱狂の思い出、

熱狂の幻はときには始末のわるいものにちがいはなかった。

このところ藤堂宗宏はジャン・コクトーの闘牛論の翻訳をしている。その闘牛論のせいで、なおさら十一年前のバルセロナ闘牛場の情景の残像を、むなしく手もとにひき寄せる努力をして、それが容易に出来ない無力さを味わっていた。闘牛場へと向う埃っぽい道筋のことも忘れてしまっている。闘牛場へ辿り着いて見上げた、野球場の塀のような、曲った壁、円型闘技場のザラザラした外壁の感じはかすかに覚えていた。

かぶりつきではないが、中程の割合見よい座席だったようにも思い出される。

新宿のサブナードと名づけられた地下商店街を歩きながらも、藤堂の頭の中には、「この偽のパースペクティヴを世界であるを取り違えて、人は生の闘技場を立去って行く」といったコクトーのことばが、ちらついていた。この四角い細長い箱のようなつまらない地下街が、おれの「生の闘技場」なのか、と藤堂は呟き、こんなことを考えるのは大人げないことなのかとすぐに反省意識が働くのを覚えるのだった。

昭和二十年の八月十五日に、熱狂というのではないが、十五歳の藤堂は頭のくらめく思いをした。昭和三十五年の六月の安保闘争の日々にも、昂奮の時があった。そして昭和四十五年の六月に、バルセロナの闘牛場で熱狂の時間を知った。その年の十一月に三島由紀夫が自決したことも、現実なのか幻なのか、一瞬われとわが眼を疑う思いの時だった。熱

狂というのとはいくらかちがった種類の衝撃ではあつても。

それにしてもおれは熱狂と名づけ得る経験など、ほとんどしてはいないのではないかという苛立たしきは、こうした地下道を歩いている折などにもふいにやってきて、藤堂をさみしいような、やるせないような気持にさせるのだった。

コクトーの闘牛論には、「人もまたこの世界という闘技場から、一人として生きて外に出ることはできないのである。あの牛のように」といった一節もあった。なるほどそうだが、何人もの友人も、叔父も、そして最近父も、この生の闘技場から立去つて行つた。Tさんも一年半前に、この生の闘技場から立去つて行つた。あとにおれはまだ残つて、まだ生きてゐる。二十歳までには、いやひょっとして十七、八までには死ぬとあの戦争の時代に思つてゐた藤堂には、まだ生きてゐるということが、不思議なことのように思える時がよくあつた。

夕暮、友人たちが碁盤を囲んでいるのを側で眺めていて（人数のせいで順番を待つてゐるのである）、ふっと待つてゐる自分の姿が何となく斜め上のほうから見えて、この男はまだ生きてゐるのか、と自分自身を他人事のように考へてゐるようなことがあつた。碁を打つ時は、洋間でも床の絨毯の上に座蒲団を置いて坐りこんで打つてゐる。側にゐる藤堂は、打つてゐる人と同じく、やはり床に坐つてソファによりかかつて他人の碁を見てゐる。

藤堂には、ソファによりかかっているもう一人の自分が見えてしまうのだった。早く自分が打つ番になればいい、そうすればそんな妄想は消えてしまうにちがいがなかった。

コクトーの『五月一日の闘牛』という本の翻訳を頼まれたとき、Tさんはもう亡くなっていた。しかし、コクトーはフランスのシュルレアリストたちとは犬猿の仲だったという理由で、藤堂ははじめひたすら尻込みをした。電話で断わり、担当者に会って断わった。Tさんにわるい気がした。Tさんが生きているなら、自分としてもとてもコクトーの翻訳など引受けることはできない。Tさんにわるい感じを与えたくなかった。Tさんはアンドレ・ブルトンに忠実な日本のシュルレアリストだったのだ。そのTさんとおれは親しくしていた。Tさんは亡くなった。おれは少しはTさんとはちがった方角に足を大きく踏み出してみたい。Tさんに忠実だった前半生とは踏み外した生き方をしたい。しかしまだTさんに義理立てしていた。シュルレアリストたちに義理立てしていた。若い頃熱中した世界中のシュルレアリストたちみんなに藤堂は義理立てをしていたのだった。

小説を書くことさえ、Tさんや、世界中のシュルレアリストたちに少し義理がわるい気がしていた。もともとシュルレアリストは小説を好まないのだ。しかし藤堂はTさんが生きていた頃から小説を書いて発表した。Tさんに少し具合がわるいような気がしていた。しかしある日、Tさんは「あなたの小説、読みましたよ」と、はにかんだような、困った

ような、それでいて意地のわるいような笑い方をした。Tさんの笑い方の中には、しかしきみの小説の内容を認めた、といったある味があり、そのことで藤堂は少し救われるような気持になったのだった。

ともかく、しかし、藤堂は、いまではそのコクトーの闘牛論の翻訳に、力を入れている自分を見出していた。一年近くもぐずぐずやる気がしないでいて、ある日熱中している自分を見つけたのだった。熱狂というものがあるならば、それを薄い薄い水割りウイスキーのように、薄く薄く水で割った熱狂、いや熱中にすぎなかったが。

その闘牛論への熱中も終って、つまり翻訳を終えて、藤堂はふらりと冬の午後の盛り場へ出て来たのだった。

コクトーは、闘技場における牛と、闘牛士と、それを取り囲む大観衆の、三者の間に働く力学を追求していた。晩年近いコクトーは、もはやかつての若い、いささか軽薄な軽業師コクトーではなく、ねばりづよく重厚に問題を追求していた。死を、大きくコクトーは意識しているのだった。自分の迫り来る死を、コクトーは重く意識している。かかるとき、死がつねに空の一角に待ちかまえる闘技である闘牛が問題となるのだった。死の影があるからこそ、闘牛の熱狂があった。それはスペイン内乱の熱狂にも似ていた。

牛と闘牛士は、婚約者同士として捉えられ、死の大使が、二者をつねに見張っているの

だった。婚約者らしく、闘牛士はいかにも華やかに、女性的なまでの衣裳に身をかためる。死を白衣の夫人——ダーム・ブランシュとコクトーは名づけていた。ダーム・ブランシュというのはドイツの伝承に出てくる霊で、家に死人が出るとき、その前兆に現われるとされるものだった。闘牛場の血は、人の生死、血と、婚礼と、闘争の意味と重ね合わされていた。人は流血し、婚礼し、闘争し、そして生の闘技場から立去って行く、そのとき白衣の夫人の裳裾がひるがえるのだ。

闘牛は午後おそくからはじめられた。その時刻を藤堂宗宏は長く忘却の淵にゆだねていたが、ついこの間のこと、古いミシュランのガイドブックのスペイン篇を何げなくひらいて、藤堂はそこに自分の十一年前のメモが書きこんであるのを見つけていた。闘牛論の翻訳のために、ミシュランの地図を参照する必要がある、藤堂は物置の隅で、埃だらけになったそのガイドブックを見つけていた。「バルセロナ闘牛場にて、午後五時四十五分から、一時間半にわたってはじめて闘牛を見る。情景筆舌につくし難し」とそれだけを藤堂は表紙裏にメモしていた。

死んだ牛の耳が切り取られて、その黒い塊が夕暮の気配の早くもたちこめた空高く投げあげられた。実際には、夏のスペインの空が暗くなるのは、八時を大分すぎたからのはずだった。まだ闘牛場には午後の最後の日ざしがつよく射していたはずである。しかし記憶

の中で、闘牛場はすでに刻々と迫っている夕闇に包まれているのでなければならなかった。死んだ牛の耳は、一個の黒い塊として空に吸いこまれ、それが落ちた様子は藤堂には見えなかった。闘牛士は自分の倒した牛の耳を切りとって、特別席のかぶりつきの、半狂乱に熱狂するスペインの着飾ったご婦人たちに向って投げたのだった。ごひいきの、それもかくくたる名流婦人たちのだろう。そのいまは幻の、午後おそくのバルセロナ闘牛場の円型が、ときおりこうして東京のもの倦く、退屈な、なまぬるい盛り場を歩く藤堂の頭の一部を襲ってくるのだった。

藤堂の頭の内部には、スペインの午後の円型闘技場が、十一年経ってもまだはめこまれているかのような幻、あくまではかない幻だったけれども。

十日ほど前、東中野の喫茶店——それはアンニユイというやるせない名前の店だったが——で、藤堂より十歳ほど若い安田という男が、「藤堂さんはファースト・インプレッションが弱いのとちがいますか、ちゃんと物を見てないのじゃないですか」と問いかけてきたのを思い出した。「幻とばかりつき合ってるのとちがいますか。もう生きている現実に興味ないんじゃないですか。死とか幻、死んだ人だけが興味の対象でしょう。それとあとは、悪党、悪漢と子供かな？」と、安田は酒に酔ったらしくしつこく絡んできた。「いや、おれはまちがっていようと、ファースト・インプレッションのゆがみのほうにこだわる。

ねぼろけながら掴んだものを、あとになって考えつづける。はっきり醒めた眼で見る事が一体何だというんだ。おれは醒めた眼よりも熱狂の幻とゆがみをとるよ」と藤堂は反撥し、なおもコップの酒をのどにおくりこんだのだった。

マタドールたちを乗せたみごとな馬が、三頭、四頭、五頭、華麗な馬技をさも見せつけるかのように展開し、ファンファーレが赤い空にこだました。馬とマタドールと槍が舞った。幻か、幻でもいい。熱狂の幻か、いや幻でも熱狂を求めるのだ。色とりどりのリボンの結ばれた剣が飛んだ。剣を首に、背に、十数本も刺しこまれた牛が、廻り込むように走った。ついに牛が殺された瞬間、藤堂の連れの若い日本人の女は、顔を蔽ってしゃがみこんでしまった。しかも熱狂する闘牛場の円型を背中にして。スペイン人たちも、アメリカの観光客らしいのも立ち上って叫び、熱狂していた。その中で一人、日本の女は人々に背中を向けてしゃがみこんでいた。「大丈夫か？」と藤堂は女の背中に手を当てた。「大丈夫よ、放つ」と女は小さな声で言った。

なおも、嵐の余勢でもあるかのように、人々の熱狂は尾を曳いているようだった。藤堂が身を起すと、死んだ牛は、大きな、あくまでも黒々とした物として横たわっており、マタドールが何かをしており、やがて立ち上ると、彼は黒い塊を礫のように空に投げ上げた。それは死んだ牛の耳だった。耳は空に飛んだ。まるで夕暮近い空を飛ぶ、原っぱの子